

## 「床屋」

日曜の朝クラウン通りを歩いていると、小ぢんまりとした床屋があった。ここはよく歩く場所なのだけど、こんなところに床屋があったなんて今まで気づきもしなかった。ちょうど髪を切りたいタイミングだったので中を覗いてみると、びっくりするほど繁盛していた。勇気を出してドアを開けると、落ち着いた感じのまじめそうな受付係のお兄さんが出てきて、僕を待合席まで案内してくれた。そして、そこで目の前に広がる光景に僕は自分の目を疑った。

お客さん達はみんな年配のおじさんで、狭いところに1列4人ずつ、2列になって座って待っていた。いや、正確に言うと、自分の頭の散髪が終わるのを待合席で待っていた。なんと、彼らは頭の上半分をきれいに取り外されていて、脳みそを丸出しにしていた。そして、そのままの格好で本や雑誌やスマホを見ながら時間をつぶしていた。他人の脳みそが自分のすぐ目の前にあるというのに、それを全く気にする様子もなかった。

僕は自分の待合席に座ったまま、恐る恐る首を伸ばして店の奥を覗いてみた。すると、1人の店員さんが取り外された誰かの頭の髪の毛を洗っているのが見えた。さらにその奥は僕の席からは見えなかったが、チョキチョキとハサミの音が聞こえてきたので、そこで誰かの頭が散髪されていることは分かった。僕はもう一度目の前に座っている8人のおじさん達の脳みそを順番に眺めながら、あんなに脳みそ丸出しで衛生的に大丈夫なのか？と不安になってきた。そして、自分の脳みそをあやうって人前にさらけ出すというのがなんとなく恥ずかしくなってきた。

一人で悶々としていると、目の前をさっきの受付係のお兄さんが通りがかった。

僕は思い切ってお兄さんに聞いてみた。

「なんで散髪するのにわざわざ頭を取り外す必要があるんですか？」

「オーナーの意向です」と受付係のお兄さんは答えた。

なんでもこの店のオーナーはある有名な東洋人で、“年に一度頭を取り外して脳をさらけ出すことによって健康を維持する”という、ちょっといかがわしい活動をワールドワイドに展開して大儲けをしているらしい。その普及活動の一環として、最近は床屋バージョンに力を入れているとのこと。いやいや、僕ら客は2ヶ月に一度脳をさらけ出すことになるんですけど…。不安はますますつのる。

ちょうどそのとき、作業着を着た若いお兄ちゃんが僕の目の前に座っているおじさんのところへやってきた。そして、散髪を終えてさっぱりした頭部分を、そのおじさんにかぶせ始めた。よく見ると、つなぎ目には白っぽいドロドロとしたノリが塗りとくられていた。そして、その頭かぶせ係のお兄ちゃんの手は真っ黒に汚れていた。僕はその光景を眺めながら、受付係のお兄さんに聞いてみた。

「これ、後々まで安全が保証されているんですか？」

すると、お兄さんは急に小声になって答えた。

「いいえ。散髪して1年後以降に生じた障害についてはこちらでは責任を負いかねます」

それを聞いた時点で、僕は脳出しをやめることにした。ただ、散髪だけはしたかったので、受付係のお兄さんに「頭が顔についたままで散髪してもらうことは可能ですか？」と聞いてみた。もしそれが無理なら僕は他の店に行って散髪をすることになるよ、と少し強気に出てみた。

「では、オーナーに聞いてまいります」とお兄さんは言って、店の奥に消えて行った。

しばらくして受付係のお兄さんが戻ってきた。そして、少し申し訳なさそうな顔をして言った。

「うちではそれはやっております」

僕はお兄さんに一言お礼を言って、それから床屋を出た。よく晴れた、いつものクラウン通りだった。